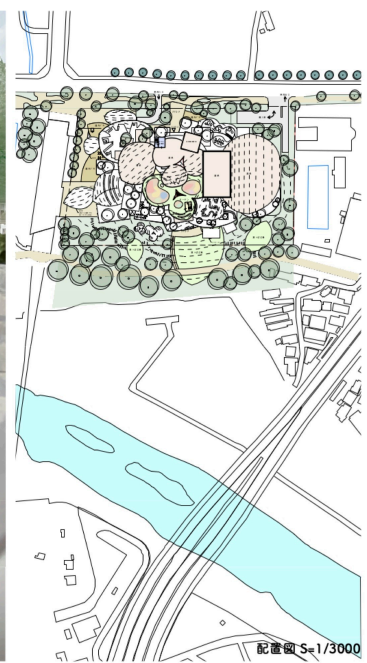
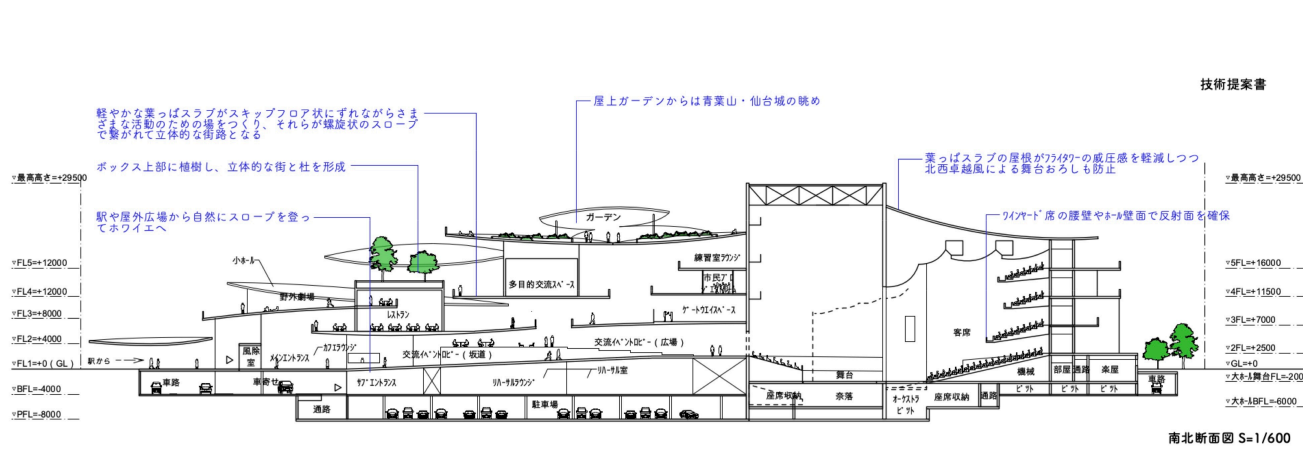


仙台を形作ってきた杜と災害と文化の歴史を体現する
おおらかな地形と巻きつく都市のような創造拠点。



配置図 S=1/3000

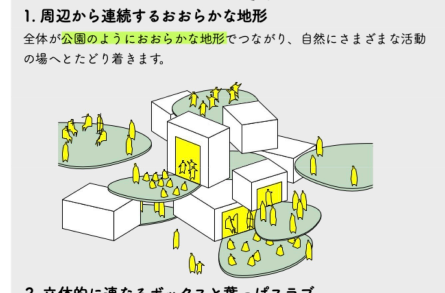


技術提案書

南北断面図 S=1/600

設計コンセプト

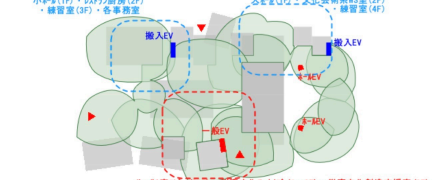
1. 周辺から連続するおおらかな地形
全体が公園のようにおおらかな地形でつながり、自然にさまざまな活動の場へととり着きます。



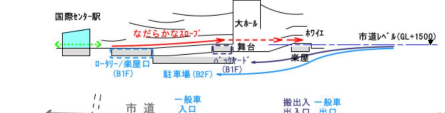
2. 立体的に連なるボックスと葉っぱスラブ
さまざまな機能を持つ「ボックス」が立体的に連なる「葉っぱスラブ」を介してつながることで、専門性と汎用性の入れ替わりや異なる活動の融合が容易となります。捲れ上がる葉っぱスラブは自然光や卓越風を取り込む環境装置でもあります。



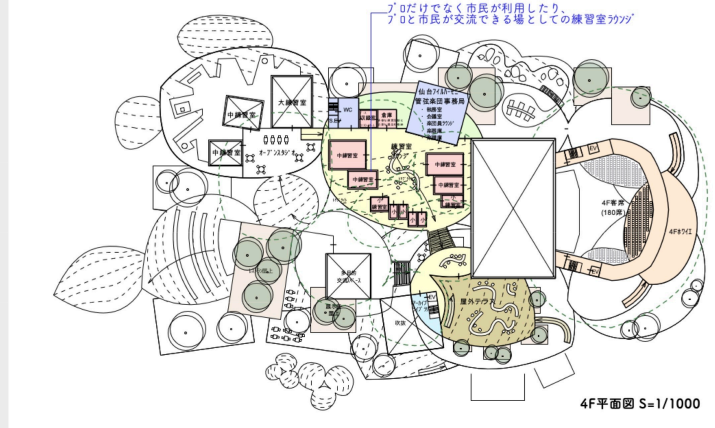
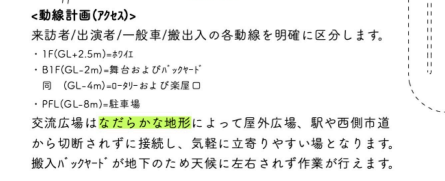
3. 地形としての音楽ホールと巻きつく都市としての文化育成拠点
施設のような建築ではなく地形に巻きついた都市のように人々が往来しさまざまな活動と出会い、それが背景の緑と連なることで、青葉山の麓の市街地との境界部の風景を形成します。



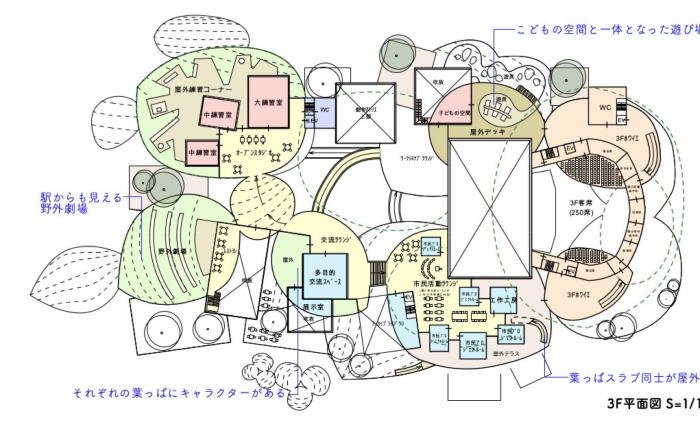
<動線計画(館内)>
各ホールの荷物用EV、職員用EV、ゾーンの利用者用EV等の縦動線を適切に配置し、容易に各ホールへアクセスできるようになっています。公演時にはもぎりで動線を明確に分ける一方で、日常時には回廊の約1/2全体を市民開放することも可能です。



<動線計画(外)>
来訪者/出演者/一般車/搬入の各動線を明確に区分します。
・1F(GL+2.5m)-おむろ
・B1F(GL-2m)-舞台およびバックヤード
間 (GL-4m)-おむろおよび楽屋口
・PFL(GL-8m)-駐車場
交流広場はなだらかな地形によって屋外広場、駅や西側市道から切断されずに接続し、気軽に立ち寄りやすい場となります。搬入バックヤードが地下のため天候に左右されず作業が行えます。



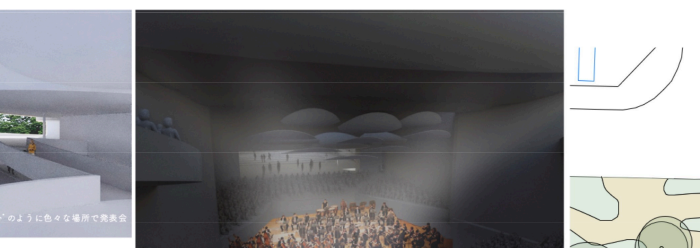
4F平面図 S=1/1000



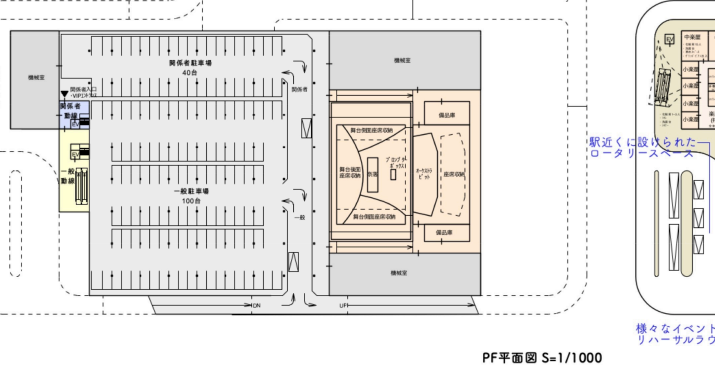
3F平面図 S=1/1000



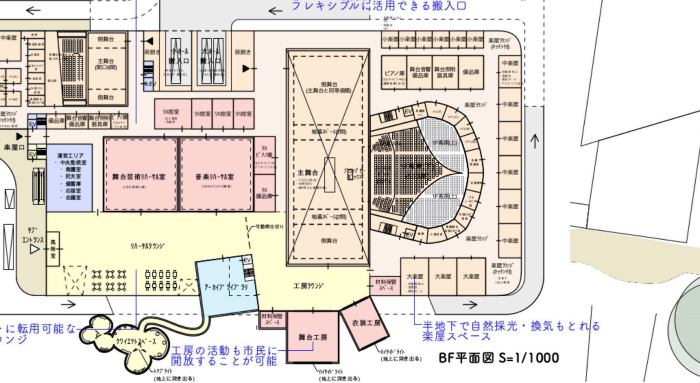
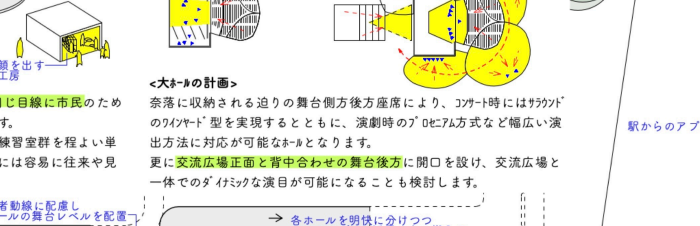
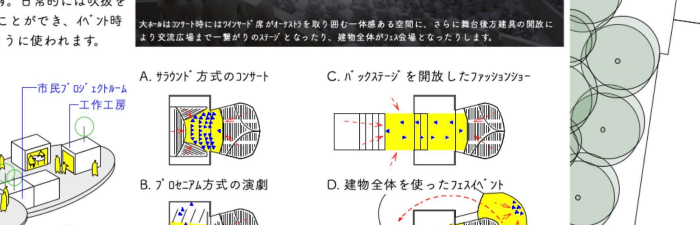
<丘状の屋外広場と連続した展示空間>
災害文化の展示空間は、ホワイエへと自然に登っていく交流広場と「桜の小径」から丘状に連なる屋外広場という2つの「公園」に挟まれるように地形的に連続し、市民が気軽に立ち寄り、交流広場の風景を形成します。



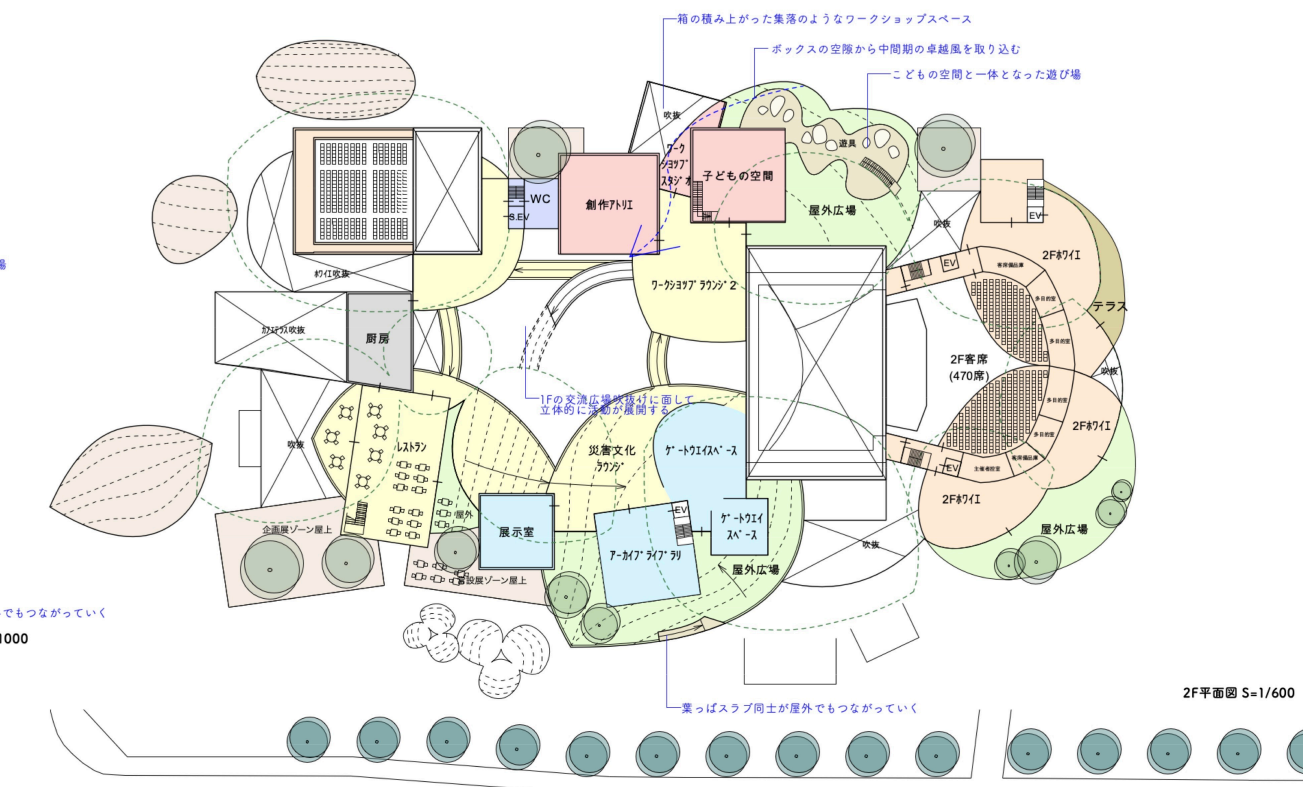
<ホール内外に連続するライオード>
大ホール内部の客席を形成するライオードはそのまま「葉っぱスラブ」としておむろや交流広場など施設全体へと連続しています。日常的には吹抜を介して様々な高さでの多様な活動を垣間見ることができ、イベント時には施設全体があたかも大きなライオードの客席のように使われます。



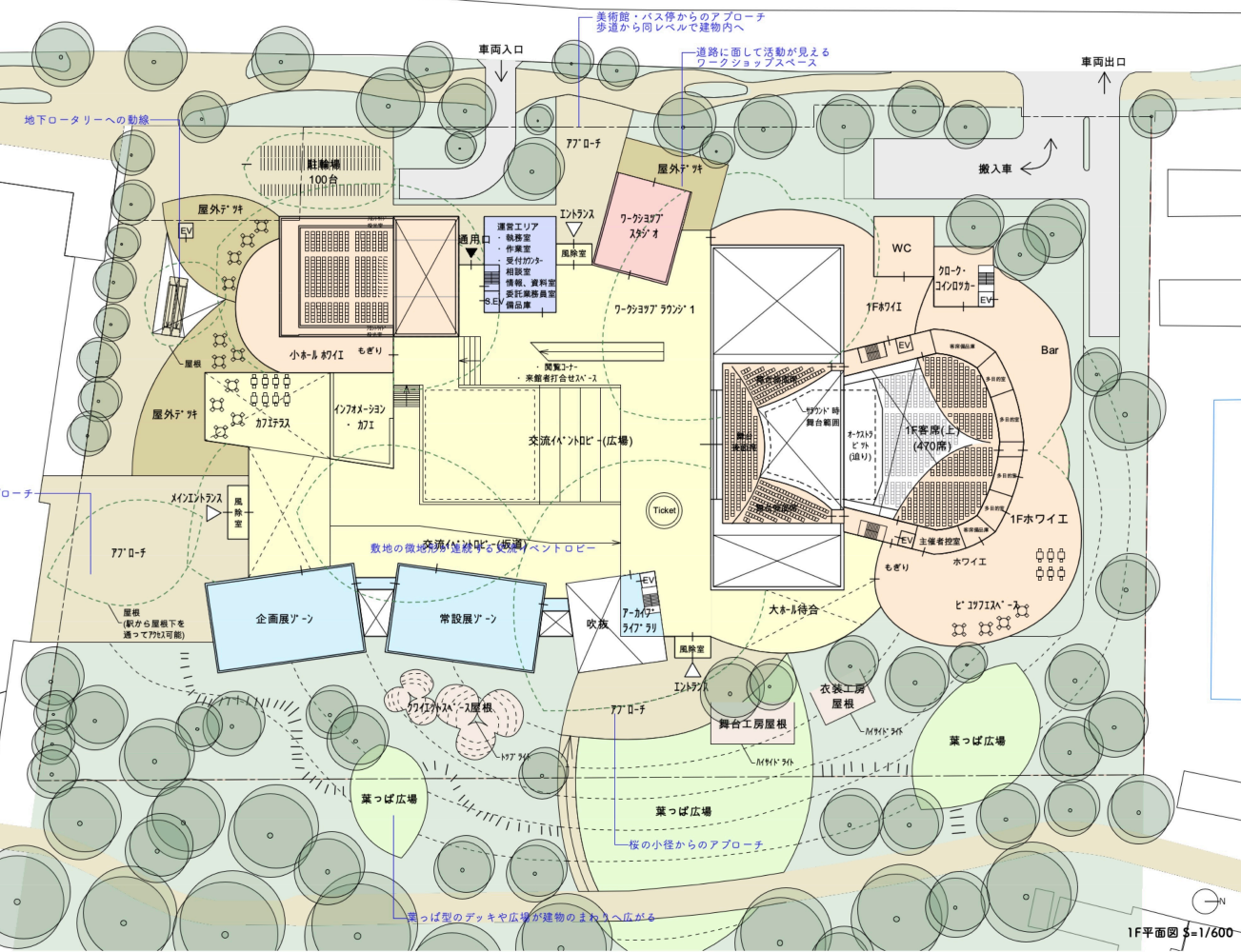
PF平面図 S=1/1000



BF平面図 S=1/1000



2F平面図 S=1/600



1F平面図 S=1/600